

桜香の追憶

エッセイスト 森下典子

デパ地下を歩いていたら、塩気のある甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐった。思わず足を止めると、淡いピンク色の和菓子が並んでいた。

「あ、桜餅……」

桜餅をくるむ葉っぱは、大島桜の若葉を塩漬けにしたものだという。その香りは、どことなく高菜の漬物に似ている。葉っぱごと桜餅を食べると、餡子の甘さに、この塩気と香りが混じり合い、独特の甘じょっぱい匂いがする。

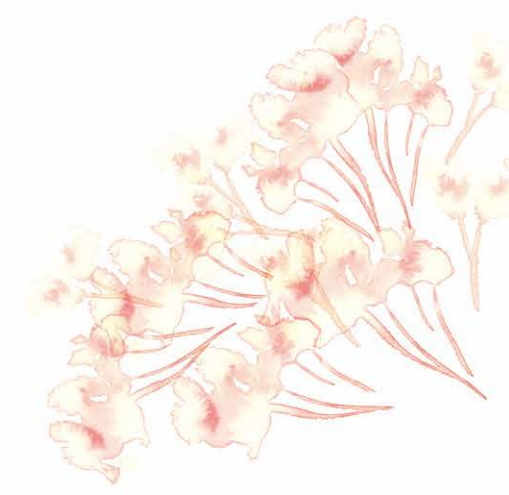
だからだろう。桜餅の匂いを桜の香りだと思っている人もいるらしい。けれど実際には、最もメジャーな桜、ソメイヨシノに香りはない。どんなに鼻をくつつ

その匂いを思い出し、度忘れしたことを思い出そうとするように、
（なんだっけ、この匂い、なんだっけ……）

と、考え続けてきたが、長年思い出せないままだった。

あれは40代半ばの春だった。桜の花がはらはらと舞い散る市ヶ谷の土手を歩いていたら、また鼻の奥にあの匂いを感じ、そして、不安に似た感情が胸にわいた。
（この匂い、何だろう……）

なぜかふと、革の匂いのような気がした。
（ベルト？いや、ベルトじゃない……
靴かな？いや、靴じゃない……）



けても、桜餅の匂いはもちろん、香りというほどのものはないのである。

それなのに、私はどういわけか、満開の桜の下を歩いた時、不意に、ある匂いを思い出す。それは、およそ花とは似ても似つかない、動物的で、どこか化学薬品っぽい匂いである。

それが鼻の奥に蘇ると、まるで今ここので、それを嗅いでいるような気持ちになるのだが、一体何の匂いだったかどうしても思い出せない。そして、その匂いと一緒に、なぜかみぞおちのあたりに、不安とも期待ともつかぬ感情が雲のようにわいてくるのだが、それもなぜなのかわからないのだ。私は花見をするたびに、

そのまましばらく土手を歩いていたら、突然、それは降ってきた。私は「あっ！」と叫んだ。
「ランドセルだ。ランドセルの革の匂いだ！」

そうだった。小学校入学の時、新しいランドセルの蓋の内側に、墨汁で住所と名前を書いてくれたのは父だった。角ばった几帳面な文字で丁寧に書いてくれたのを覚えている。その真新しいランドセルの革の匂いだ……。

一年生の4月は父が学校まで送ってくれた。手をひかれて校門の前まで来ると、一人で門に入る。校門の横に桜が咲いていて、風がまだ冷たかった。新しい世界に一人で入って行く不安に心が揺れた。その桜の下の6歳の感情が、ランドセルの革の匂いと一緒には蘇るのだ……。

その父も他界して今年で26年。父は酒好きだったが甘いものにも目がなくて、この季節になると、よく桜餅を買ってきた。最近、桜を見ると、芭蕉の句を思い出

す。
「さまざまの こと思ひだす 桜かな」
咲き誇る桜を見ていると、嬉しくて胸がいっぱいになり、そしてなんだか泣きたくなる。
そんな花、桜の他にあるだろうか……。



もりした のりこ / 神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。「週刊朝日」の名物コラム「デキゴトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日は好日』『猫といっしょにいるだけで』（新潮文庫）、『いとしいたべもの』（文春文庫）など。

